

## 【表現学関連分野の研究動向】

### 文章・談話研究 (2)

—関連領域を含む視点から—

立川 和美

文章・談話研究は、大きな言語単位を対象とする点で非常に多様であり、2013年6月発行の表現学会編『言語表現学の諸相 第2巻』清文堂出版に見られる一連の研究でもそうした特性がよく表されている。近年は、文章と談話の連続性や関係性を踏まえた研究や、社会事象と深くかかわる文章・談話を扱う研究も多く見られる。ここでは、前回の研究動向以後2015年までの研究動向を概観したい。

まず、文章と談話の両方を射程に入れた研究としては、石黒圭・橋本行洋(2014)『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房、阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三編(2015)『文法・談話研究と日本語教育の接点』くろしお出版がある。前者は日本語学会2013年度春季大会のシンポジウムをもとにした論文集であり、後者は、文法、談話、日本語教育の諸分野に関わる近年の諸研究が収められている。

個別研究についても様々なアプローチが見られるが、たとえば文章では、石井久美子(2014)「大正期雑誌の書き手・読み手の位相差と外来語の使用実態」『表現研究』99、石出靖雄(2014)「視点の違いが文構造に与える影響—文末表現を中心に—」『表現研究』100など、テキスト内の表現について書き手などの外的要素から考える研究が見られた。談話では、三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版といった従来からのコミュニ

ケーション研究に加え、東日本大震災時の公共メディアの言語を批判的談話分析によって考察した名嶋義直・神田靖子編(2015)『3.11 原発事故後の公共メディアの言説を考える』ひつじ書房や、EPAによる外国人介護福祉士の受け入れをとりあげた上野美香(2013)「介護施設におけるインドネシア人候補者の日本語をめぐる諸問題—日本人介護職員の視点からの分析と課題提起—」『日本語教育』156など、現代の日本社会と深くかかわる研究が進められた。さらに、植田栄子(2014)『診療場面における患者と医師のコミュニケーション分析』ひつじ書房といった、医療コミュニケーションのような新たなトピックに関する研究も注目される。

最後に、ここ数年の進展が著しい大規模コーパスについて触れておく。前川喜久雄監修、山崎誠編(2014)『講座日本語コーパス2 書き言葉コーパス—設計と構築』、同(2015)『講座日本語コーパス3

話し言葉コーパス—設計と構築』、前川喜久雄監修、田野村忠温編(2014)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』では、日本語コーパスを活用した研究について様々な角度から詳述されている。ユニークなものとしては、石井正彦・孫栄爽(2013)『マルチメディア・コーパス言語学—テレビ放送の計量的表現行動研究』大阪大学出版会があり、3種類のテレビ放送のコーパスに基づき、視線や身ぶり等と音声言語との関係について研究が行われている。

このように文章・談話研究は、社会や生活と深く関わりながら、分析対象のジャンル、研究手法ともに今後も広がっていくと考えられる。(流通経済大学)